

## 私の国際社会保障

平石長久

私の国際社会保障には、特定の人物も本も存在していない。それらにこだわらないで、気ままにいろいろな領域を取り上げてきた私は、方外の域で勝手なことをしていたといえる。その私に一卷の書を求めるならば、それは1942年頃から時折気のむいたときに開いている各種の『老子』であろう。

ところで、私にとって「国際」とは、日本人が少数派のところ、私が育ったことだろう。そこでは、多くの日本人は日本人社会の中だけで付き合っていたが、一部の仲間と同様に、私は複数の言語で土地の子どもらとも楽しく遊んでいた。1943、44年に、中国の親のところ、暮っていた10代末近い私が、朝鮮独立運動の元気な命知らずの若者達を支援していたのは、子どもの頃の延長だったのだろう。中国での被害と加害を公平にみていたその頃の私は、乞食を含むいろいろな中国人と付き合い、その中には反日や抗日の友人達もいた。また、戦後間もない頃、私がGHQのあるコマンドに数年間いたのも、「国際」にかかわりがあるだろう。私は子どもの頃から日本を内と外からみていたことになる。

さて、1950年代のわが国では、海外の社会保障研究は欧米の例が主で、オセアニアなどの例もあった。私はそれらを一応ながめて、対象にされない国々の社会保障を取り上げた。本来、人真似の嫌いな私は、人の手がけないものに取り組むのが好きである。

私はそのような1950年代末頃から1960年代後半にかけて、1人で約80カ国の社会保障を取り上げた。その頃、「体を動かさなくてすむので、楽でいいでしょう」と、私にいった人がいた。かれは私が乏しい各種の資料や海外との連絡に苦労しながら、厄介な（しかし、楽しい）作業をしていたのを知らなかったのである。私はかれから「人のやっていることをよく知らないのに、単純に批判したり、評価してはならない」という貴重な教訓を得た。それにしても、人から評価されない馬鹿気た所業を、1人で10年近く続ける愚か者はもう現われまいだろう。地位も名も無縁で、活字になった結果も手許に残さない私の作業は、道楽の類といえる。しかし、その作業はその後の仕事、および海外の個人や組織との付き合いに大変役にたった。

国際社会保障では、このような作業は「各国の社会保障」や「一般のおよび特殊な動向」の研究領域に属する。これらの領域では、ある時点の社会保障が主に取り上げられ、これは背後の広範かつ多様な条件や機能などを欠く例が多い。たとえば、各国の社会保障では、現在の形や機能をもつ制度には、背後に存在した各種の条件やそれらの推移も知らなければならない。そのためには、古

い時代からの人びとの生活や考え方, 自然や社会経済を含むいろいろな条件を取り扱うことになる。それらをまとめた便利な資料はまず存在しないので, 私はそれらを求めて, 多種多様な雑学を大いに楽しむことになった。国際社会保障では, 私は狭い視野と性急な追求ではなくて, 気長に楽しく雑学の世界も放浪している。また, 弾力的な思考で常識や権威を疑う私は, 非常識も楽しんでいる。それらは視点や視野を変え, 話題も豊富にするのである。

このような私は思考の多様性と独創性を求めながら, 広い視野と新しい観点で, 各国の社会保障を取り上げるとともに, 国際社会保障に新しい領域を広げてきた。それらは他国による各種の「国際的干渉」, 旧植民地に残った旧宗主国の「国際的遺産」, 各種の分野と手段の「国際比較」, 「内外人の平等待遇」, 各種の形と方法の「2国間や複数の国と組織の国際協力」, 専門家の「国際的技術協力」など(その他は省略)である。私は1970年から22年間手伝った日本女子大学で, これらを学生達に伝えたが, このように包括的かつ体系的な国際社会保障を取り扱う例は, わが国では他にみうけられない。ちなみに, 国際的な協力の例では, 私はILOの国際技術協力で, 「社会保障計画部門」の専門家リストに, 1975年から登録されていたし, また, 1960年代から現在までISSAの“Research Correspondents”(個人と団体)の1人になっている。

いずれにしても, 私の広範かつ多様な国際社会保障は, 長年にわたりいろいろな多くの本や資料に, また, 個別的な国々や国際的な各種の組織に, そして, 海外の多くの人びとに支えられており, これらは私の貴重な財産である。そして, 時には, 私はこれらに各種の形と方法で協力している。海外の多くの人びとの中には, 40年近い間にすでに故人になったり, 現役から退いた人びとがおり, これらはいずれも忘れ難い人びとで, 引退した人びとの一部とは, 付き合いが今も続いている。ともかく, 国際社会保障の研究には, 海外の組織や個人と息の長い付き合いが必要で, それには, 自分よりも人を大事にする配慮と習慣, また, 自分にうけるだけでなく, 相手にも提供する相互の協力などがきわめて大切なのである。

(ひらいし・ながひさ 前岐阜経済大学教授)